

(42)

美濃國土岐郡日吉村經塚及び發見遺物(林)

五七二

美濃國土岐郡日吉村經塚及び發見遺物

林 魁 一

美濃國土岐郡日吉村本郷字南垣外に郷社酒波神社あり。祭神不明にして、傳説に依れば源三位賴政の建立なりと云ひ、永祿元年火災に罹り、同二年改めて建築せしは確にして中世より八幡神社と稱せしが、又近年に至り昔の如く酒波神社と改めたる由なり。社殿は凡そ百十尺程高き第三紀砂岩の丘陵上に近き所にありて東南に向ひたり。其の地勢は第一圖にて知るべく、丘陵の東南麓に

し。社殿と社務所の間は粘土質の地にして、雨後又は冬期に泥深く往來に困難なるを以て、本殿の裏即ち經塚の在る處に徑一尺程の丸石在りしを以て此の丸石を利用して路上に石疊を作らんとして丸石を取りたるに壺二個、鏡一個を發見せしより色々注意したれば次の如き遺物を發見せり。

縣道中街道ありて所々に人家あり。麓の西方には里道加茂街道あり、神社境内には老檜雜木森々として社頭より西南を望めば樹木の間より日吉村本郷の茅屋田畑を眼下に見るべき眺望好き所なり。此の社殿より五間程も西北は丘陵の頂にして十餘年以前に發掘せし經塚の存在せし所なり。發見の當時余の調査せし大略を報すれば左の如

- 形状を知り得べきもの 二個
- (一) 壺 形状を想像すべきもの 一個
其他瓶と思ふべき破片 數個
- (二) 茶碗形土器破片 數個
- (三) 鏡 五面
- (四) 扇の骨をも考ふべき形の植物質のもの五六枚
- (五) 經石 多數

(六)古 錢

二個

(七)短 刀

四口

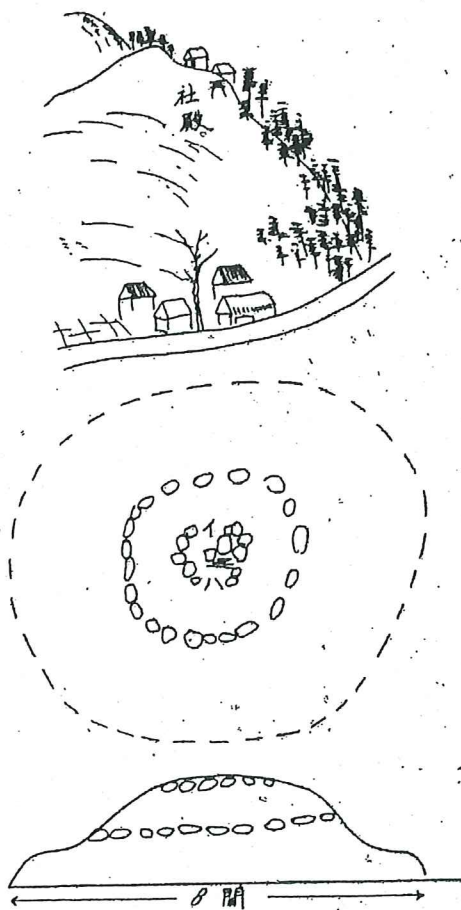
壺は形狀を知り得べきもの二個あり、一個は完全に第三圖(4)の如く、經塚北方即ち第一圖の(イ)より發見し白鼠色素焼にして内部に土塊ありたり云ふ。此の土器の下に軟き白色素焼土器破片存在せし由にて破片より考へば第三圖(6)の如き形狀にして蓋あり。

字を記入ありしや不明なるも一個の石に「次」の字を記せり。これより考へて見れば一字一石の經石云ふべきか。又今日使用する肥料瓶に似たる色の素焼筒形土器の破片も多數發見せり。
茶碗形土器は破片なるも白色朝顔花形にして絲底に粗の痕跡附著せり。

短刀は四本發見すれども一本は破損し、三本は完全に

近く全部錆化し大なるは長七寸、小なるは長さ五寸あり。形狀は第三圖(8)に示すが如く、大なるは少しく反あり皆經塚第一圖(ロ)より發見せり。

第一圖



(48)

(5)の壺は破片を集めて漸く形狀を知りたるものにして質堅く澁紙色を呈し經塚即ち第一圖の(ハ)より發見し内部に小石即ち丸石の徑一寸内外なるもの數多存在せり。此の小石は殆んご全部を捨てたるを以て如何なる文

分(同拓本(三三))、(四)徑二寸五分、(五)徑二寸七分(同拓本(五))。

裏面紋様は拓本(二二)(三三)(五五)にて知るべし。以上五個中(二)及び(四)は現今鏡の所在不明に付き拓本を省けり。

美濃國土岐郡日吉村經塚及び發見遺物(林)

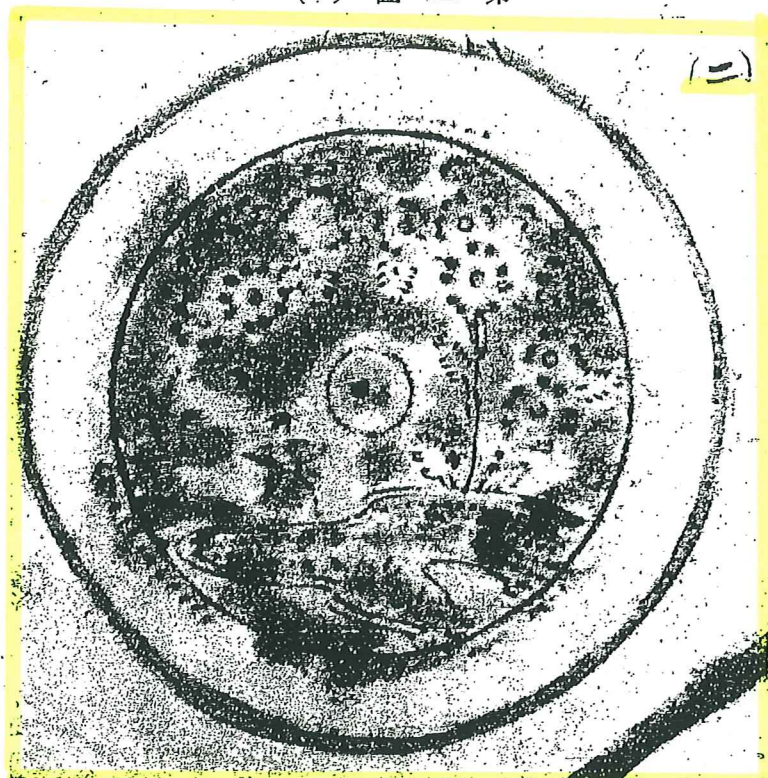
(44)

古錢は二個を發見したるも一個は直に失ひ一個は文字不明なるも支那五銖錢なるが如し第(7)を見るべし。扇骨形は黑色にして紙の如く薄く現在長三寸、幅四分より二分迄あり。

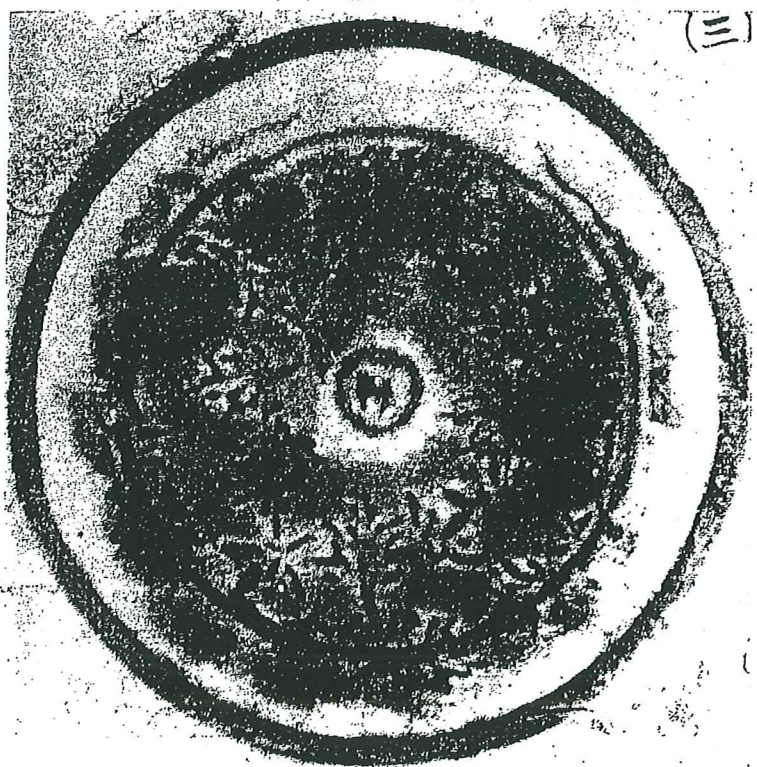
經塚は平面圖即ち第一圖(2)及び側面圖即ち同(3)に示すが如く、徑八間、高一間程ある塚形の地上に直徑二

間半程圓形に圓石を竝べて境界の如くなし、其の中に又直徑一間、高三尺程圓塚形に土ミ石を盛りてあり、其頂上より二尺五寸位迄の間にて土ミ石に交り種々の遺物を發見せり、故に土器短刀の外は何れの部分に存在せしや不明なり。

(一) 圖 二 第



(二) 圖 二 第



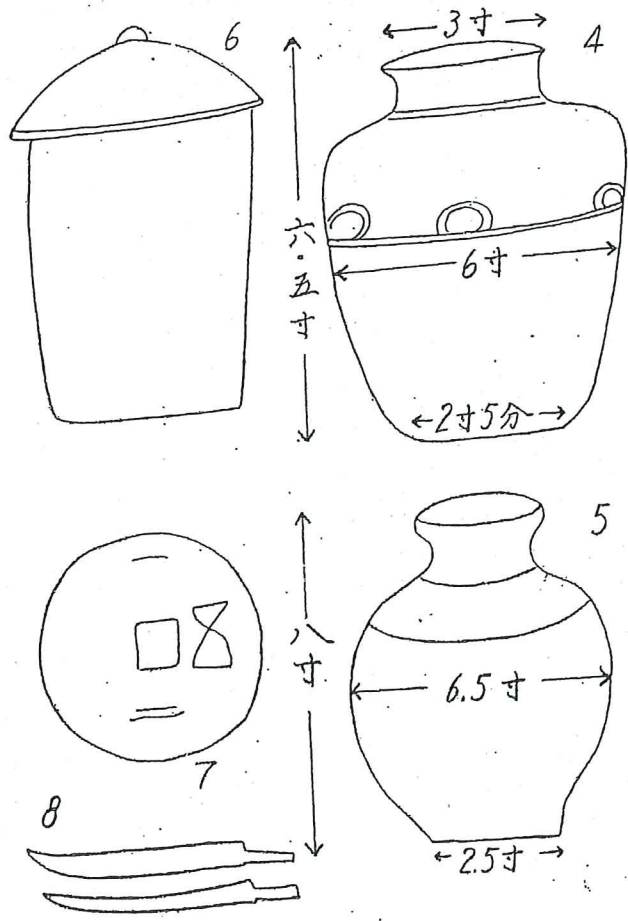
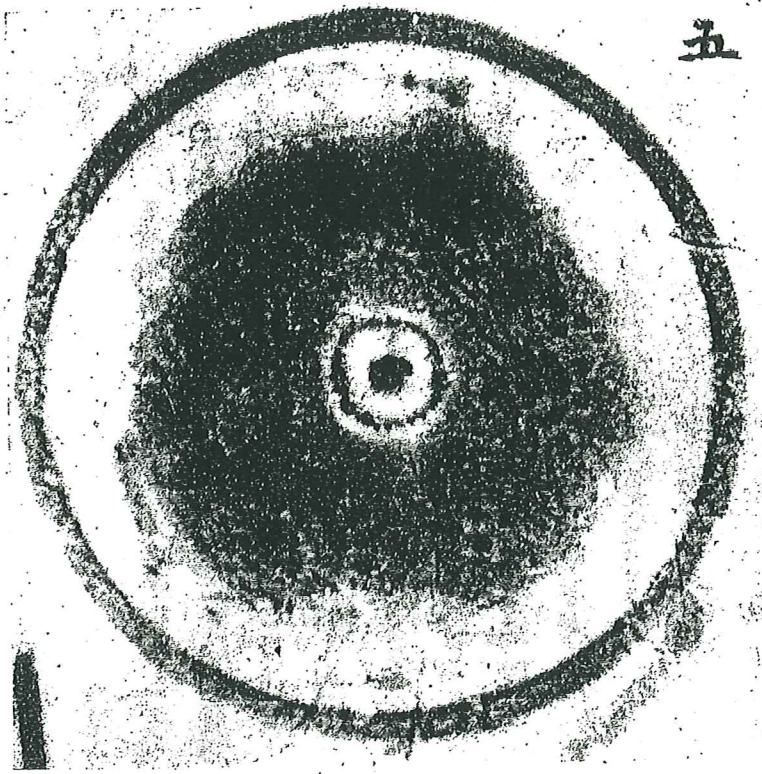
(三)

(45)

美濃國土岐郡日吉村經塚及び發見遺物(林)

五

第二圖 (三)



第三圖

五七五